

セルフエスティーム調査を用いた学生相談に関する研究

黒 木 利 作

Research on consultation of student that uses self-esteem investigation

Risaku KUROKI

Abstract

In recent years a decline of the scholastic ability of university students has been remarkable. It may be said that this is partly because of free collage admission. The low academic ability of university students seems to have a relation to their self-esteem.

The purpose of this study is to investigate the actual condition of troubles for college freshmen and their self-esteem. We are also concerned with correlation between them. It is reasonably concluded that self-esteem tends to be low about the student with a great trouble.

Finally what I wish to show here is reference materials based on the research for the future counseling service for students.

We surveyed 301 freshmen of A university using a questionnaire.

Key words : self-esteem, college freshmen, counseling service for students

セルフエスティーム、新入学生、学生相談

1. 調査の概要

(1) 目的

大学全入時代といわれて久しいなか、多くの大学において学生の量的、質的变化は看過できない形で現れてきている。今回の調査の目的はA大学で行ったアンケート調査をもとに、現時点における学生側の悩みの実態を知るために、①学生相談に関する基本調査②自尊心（セルフ・エスティーム）調査——を通して現状を把握するとともに、今後の学生相談の基礎的資料を得ることにある。

(2) 方法

上記目的をふまえた上で、以下2種類の調査をおこなった。

① 学生相談に関する基本調査

この調査の質問項目については三重大学の『学生生活実態調査報告書（2002年度）』の中から、特に「悩み」と「就業」に関する部分を参考にした。

② 自尊心（セルフ・エスティーム）調査

この調査についてはいくつかの問題点は指摘されているものの、自尊心を測定する尺度として現在最も使用されている、ローゼンバーグ（Rosenberg,M）の自尊心

情尺度⁽¹⁾を用いた。評価尺度としては「とてもそう思う」を1とし、「そう思う」を2、「あまり思わない」を3、「全くそう思わない」を4とする4件法で行った。

(3) 対象者

A大学の平成20年度新生（1年生）全303名のうちガイダンスに参加した301名を対象にした。

(4) 調査日

平成20年4月7日〔月〕

(5) 回収結果

サンプル総数 301

有効サンプル数 290

◇学生相談ニーズに関する基本調査とセルフ・エスティーム調査との関連性を見るためにセルフ・エスティーム調査について回答に不備のあるサンプルは除外した。

(6) その他の事項

◇本調査は質問紙による無記名でのアンケート形式をとり、集計にはEXCELを用いた。

◇以下、学科名については社会福祉系を「W」、介護系を「C」、心理系を「P」、産業・スポーツ系を「I」と表示した。

◇本調査は学生部及び学生相談室の了解を得たうえでおこなった。

2. 調査結果

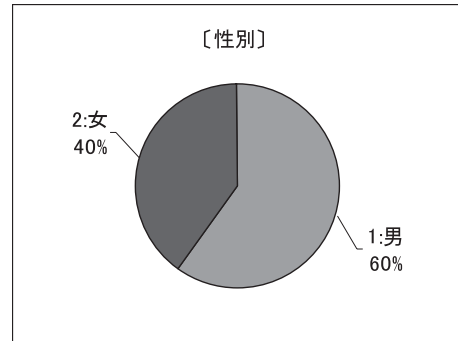
(1) 学生相談ニーズに関する基本調査

◆ Q1：性別

回答者290名のうち、男性は173名（60%）、女性は117人（40%）であった。学科別に

【Q1】性別

	人数（人）	割合（%）
1：男	173	60%
2：女	117	40%
計	290	100%



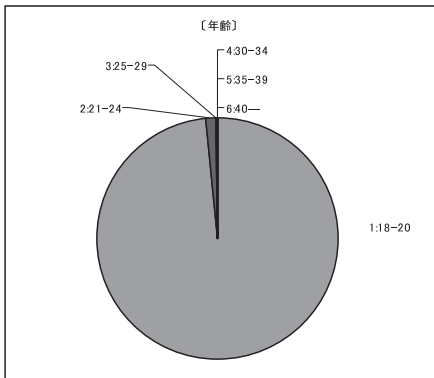
見てみるとW学科（男性62%：女性38%）、C学科（男性48%：女性52%）、がP学科（男性48%：女性52%）S学科（男性78%：女性22%）であった。この結果から一般的な福祉の職場のイメージからすると女性が少ないといえる¹⁾⁽²⁾。しかし学科の特性による違いもあり、S学科のように産業の他にスポーツにも軸足を置いている学科についてはやはり男性が多くなる傾向がみられた。

◆ Q2：年齢〔平成20年4月1日現在〕

【Q2】年齢

	人数（人）	割合（%）
1：18-20	285	98.3%
2：21-24	4	1.4%
3：25-29	1	0.3%
4：30-34	0	0.0%
5：35-39	0	0.0%
6：40—	0	0.0%
計	290	100.0%

年齢構成では18歳～20歳までの学生が全体の98%を占めており、社会人学生とみられる学生は非常に少ない。社会人学生は概して向学心があり、学習に対するモチベーションが高い。彼らが及ぼす影響は若い学

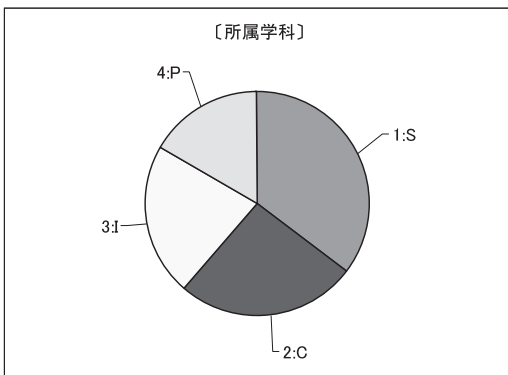


生のみならず、教員を含めた大学全体にプラスの影響を及ぼす可能性が高い。今後の学生募集のひとつの選択肢として考えていく必要がある。また、現状において数は少ないとはいえ、彼らに対する心理面、学習面でのサポート、バックアップは必要である。

◆ Q3：所属学科

◆ Q3：所属学科

	人数 (人)	割合 (%)
1 : S	102	35.2%
2 : C	75	25.9%
3 : I	65	22.4%
4 : P	48	16.6%
計	290	100.0%



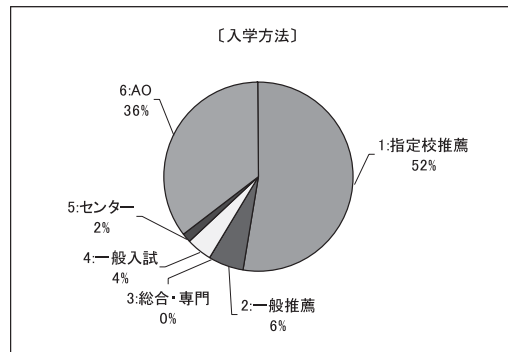
全体を見た場合 S 学科が35.2%と最も多く、次に C 学科が25.9%、I 学科が22.4%、

P 学科が16.6%となっている。定員充足率については触れないが、やはり多くの大学と同様少子化、その他の理由による入学者数の減少がみてとれる。福祉系の大学は社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士等の国家資格の受験資格が得られるというメリットがある。しかし今後は資格に依存するだけではなく、キャリア教育や生涯教育も含めた学生生活全体に対するサービス（商品）の質を高めていく必要がある。

◆ Q4：本学への入学方法はどれですか

【Q4】本学への入学方法

	人数 (人)	割合 (%)
1：指定校推薦	152	52.4%
2：一般推薦	17	5.9%
3：総合・専門	1	0.3%
4：一般入試	12	4.1%
5：センター	5	1.7%
6：AO	103	35.5%
計	290	100.0%



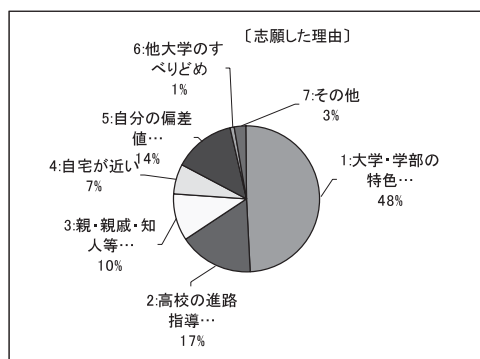
入学方法については指定校推薦入試が52.4%を占め、以下 AO 入試 (35.5%)、一般推薦入試 (5.9%) 一般入試 (4.1%)、と続いている。このことはペーパー試験による学力試験をせずに入学した学生が全体の約90パーセント存在していることを意味する。この背景には学生は確実に入学でき

る方法をまず選択するということに加え、入試という入学のためのハードルが低くなってきている現実がある。現在大学生の学力不足が問題になってきているが、入学検定における学力試験というフィルターが機能していない現実をまず受け入れ、そのうえで教育を主軸とした学生の利益に還元できるサービスの提供をしていく必要があるだろう。

◆ Q5：本学を志願した最も大きな理由は何ですか（2つまで選択可）

【Q5①+②】本学を志願した最も大きな理由

	人数（人）	割合（％）
1：大学・学部の特徴（理念・資格等）にひかれて	232	49%
2：高校の進路指導による	80	17%
3：親・親戚・知人等にすすめられたから	49	10%
4：自宅が近い	32	7%
5：自分の偏差値で入れるから	65	14%
6：他大学のすべりどめ	5	1%
7：その他	12	3%
計	475	100%



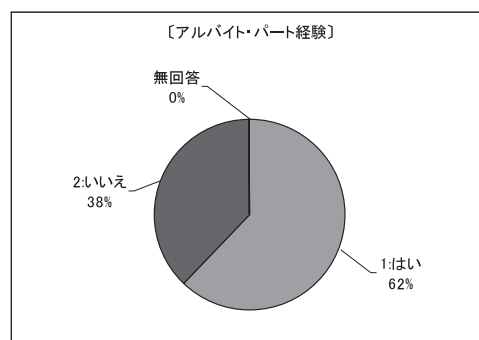
累計で見ると「大学・学部の特徴（理念・資格等）にひかれて」が最も多く、全体の48%を占めた。このこと自体は喜ばしいことであるが、心理的負担を感じずに最も答えやすい項目であったということだけなのかもしれない。高校3年生の段階で明

確に自分の将来のビジョンを持てるものなのであろうか。筆者の体験からしてもその時期は自分自身のアイデンティティが確立されておらず、将来についてまで考えるゆとりはなかったと覚えている。その点から考えると「高校の進路指導による」「親・親戚・知人等にすすめられたから」「自分の偏差値で入れるから」といった非主体的な理由をもつ学生に対して注意を払っていく必要があるだろう。そうしたなかで「とりあえず」入学してきた学生に対して、今後アイデンティティの確立の過程でセルフ・エスティームを高められるようなかわりをしていく必要があるだろう。

◆ Q6：過去1年以内にアルバイト・パート勤務をしたことがありますか

【Q6】過去1年以内のアルバイト・パート経験

	人数（人）	割合（％）
1：はい	180	62.1%
2：いいえ	110	37.9%
無回答	0	0.0%
計	290	100.0%



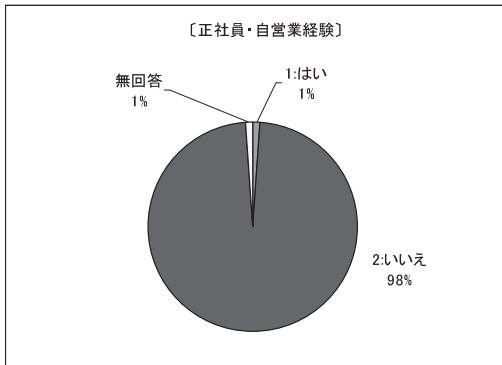
この質問項目は就業経験がセルフ・エスティームの強さと関連するかどうかを見極めることを目的にした。この結果から学生の約6割は過去1年以内に就業経験があるということがわかる。そのことはやや古い

データであるが全国高等学校PTA連合会が平成11年に行った『高校生のアルバイト等に関する調査研究』の結果ともほぼ一致する²⁾(³⁾。就業経験は一定の自己表現能力を必要とする。なぜなら採用の際には必ず面接があるであろうし、仕事とは他者とのコミュニケーションの上に成り立つ行為といえるからである。

◆ Q7：過去に正社員・自営業での就業経験がありますか

【Q7】正社員・自営業での就業経験

	人数(人)	割合(%)
1：はい	3	1.0%
2：いいえ	284	97.9%
無回答	3	1.0%
計	290	100.0%



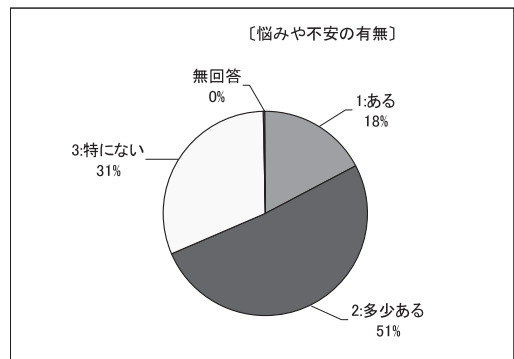
Q2において社会人学生が非常に少ないということが明らかになった。それゆえ過去に正社員・自営業での就業経験をもつ学生が少ないのは当然といえる。しかし、社会人学生が少ないということは良いことなのであろうか。教員免許をもっていない大学教員は多い。また社会経験が豊かで、権利意識も高い社会人学生を受け入れることに対して腰が引ける部分があるのかもしれない。しかし教員免許はリタイアした社会人を主な対象とはしていない。であるとす

れば大学こそがそうした人たちの向学心に答えるべき社会資源といえるのではないだろうか。

◆ Q8：現在悩みや不安がありますか

【Q8】現在の悩みや不安の有無

	人数(人)	割合(%)
1：ある	51	17.6%
2：多少ある	147	50.7%
3：特にない	91	31.4%
無回答	1	0.3%
計	290	100.0%



この結果から学生のほぼ5人に1人は悩みや不安に苦しめられているという現状が見えてくる。しかしこの年代の青年で悩みが「特にない」というのも逆に気がかりではある。悩みが「ある」と答えた学生の学科別データを見てみるとC学科が21.3%で最も高く、W学科19.6%、I学科15.4%、P学科10.4%と続いていた。

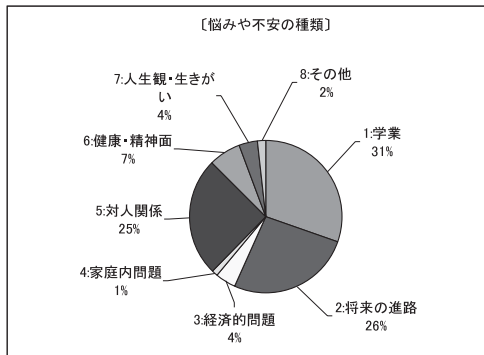
◆ Q9：現在のあなたの悩みや不安は何ですか（2つまで選択可）

悩みの内容としては「学業」が最も多かった。その背景には高校時代の成績に対する自信のなさがあると思われる。そのことはQ4でみたとおり、入学に際して学力をほとんど問われなかった学生が多いというこ

とともに密接に関係しているのは明らかである。また、「学業」「将来の進路」とともに「対人関係」で悩んでいる学生が多いということも明らかになった。「対人関係」の内容までは今回の調査では問うていないが、セルフ・エスティームの低さに起因するコミュニケーション力の不足も考えられる。今後の研究課題であろう。

【Q9①+②】現在の悩みや不安の内容

	人数 (人)	割合 (%)
1：学業	118	30%
2：将来の進路	103	26%
3：経済的問題	17	4%
4：家庭内問題	5	1%
5：対人関係	98	25%
6：健康・精神面	27	7%
7：人生観・生きがい	16	4%
8：その他	6	2%
計	390	100%

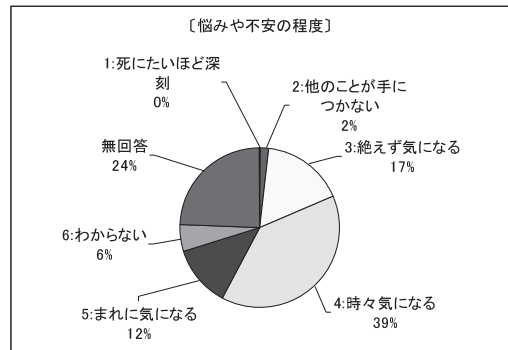


◆ Q10：その悩みや不安はどの程度ですか
「死にたいほど深刻である」「他のことが手につかないほど」「絶えず気になる」を合わせると悩みが「ある」と答えた学生のほぼ5分の1を占める。これらの学生にとって晴れて大学に入学したという成功体験は彼らの悩みを払拭できるだけの効力はないということであろう。なお以前調査した他の福祉系大学での調査では心理系の学

生に悩みの「深い」学生が多くみられたが、今回の調査ではそうした傾向はみられなかった³⁾(⁴⁾。

【Q10】悩みや不安の程度

	人数 (人)	割合 (%)
1：死にたいほど深刻	1	0%
2：他のことが手につかない	5	2%
3：絶えず気になる	48	17%
4：時々気になる	113	39%
5：まれに気になる	36	12%
6：わからない	16	6%
無回答	71	24%
計	290	100%

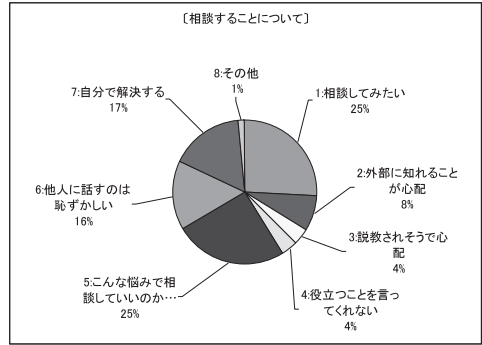
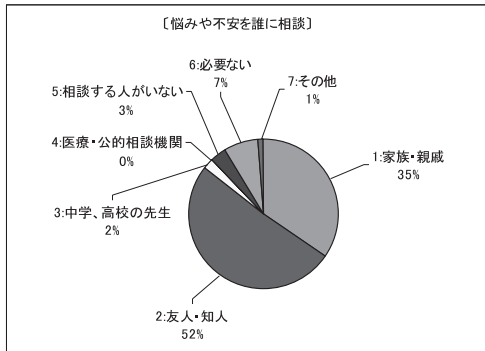


◆ Q11：悩みや不安を誰に相談していますか（2つまで選択可）

【Q11①+②】悩みや不安の相談相手

	人数 (人)	割合 (%)
1：家族・親戚	113	35%
2：友人・知人	166	51%
3：中学、高校の先生	7	2%
4：医療・公的相談機関	1	0%
5：相談する人がいない	11	3%
6：必要ない	24	7%
7：その他	4	1%
計	326	100%

新入学生は高校とのつながりもなくなり、入学してきた大学との関わりもほとんどない。そうした中で相談できる相手というの



やはり家族や友人・知人ということになるだろう。また悩みの質によっては誰にも相談できないといったことも十分考えられる。学生相談を担当する教員の役割としてはこの時期の彼らに対する見守りや心のケアは不可欠といえる。

にとって大学の教員との接触は初めての経験である。この時期に、敷居が高い大学教員の研究室の扉をノックするという行為は難しいかもしれない。その敷居を低くする努力は大学側にあるだろう。

◆ Q12: 悩みや不安を「学生相談室」の相談員に相談することについてどう考えますか (2つまで選択可)

【Q12①+②】 学生相談室で相談することについて

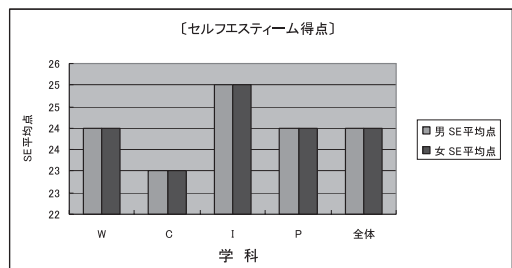
	人数 (人)	割合 (%)
1: 相談してみたい	93	26%
2: 外部に知れることが心配だ	29	8%
3: 説教されそうで心配だ	13	4%
4: 役立つことを言ってくれないと思う	13	4%
5: こんな悩みで相談していいのかわからない	91	25%
6: 他人に話すのは恥ずかしい	56	16%
7: 自分で解決するから必要ない	60	17%
8: その他	5	1%
計	360	100%

相談してみたいが、しかし……といった心境がこの結果から読み取れる。「相談してみたい」という気持ちがある一方で「こんな悩みで相談していいのかわからない」といった自信のなさに起因すると思われる気持ちがみえてとれる。入学して間がない彼ら

(2) 自尊心 (セルフ・エスティーム) 調査

a. セルフ・エスティーム得点

学科名	男		女	
	SE 平均点	満点に対する割合	SE 平均点	満点に対する割合
W	24	60%	24	60%
C	23	58%	23	58%
I	25	63%	25	63%
P	24	60%	24	60%
全体	24	60%	24	60%



セルフ・エスティームの得点は10から40の間に分布する。また、セルフ・エスティームの平均得点は一律に決定できないものの、

青年の場合は40点満点に対する25点(62.5%)あたりとされている⁽⁵⁾。以上の結果からセルフ・エスティームの平均に関して男性、女性ともに24(60%)、ということが明らかになった。この数字だけをみると全体として若干低いものの、普通であるといえるであろう。

b. セルフ・エスティームと学生の就業体験との関連

就業体験	低群 (SE 得点10~19)		高群 (SE 得点28~40)	
	人数	割合	人数	割合
あり	30	63%	33	66%
なし	18	38%	17	34%
合計	48	101%	50	100%

今回は大まかな傾向をつかむ目的で、低群(SE得点10~19)48名と高群(SE得点28~40)50名について、それぞれの就業体験とセルフ・エスティームとの関連を調べた。詳細に分析するのであればある値のSE得点を基準に低群と高群とに分け、全数を対象とするべきであろう。

以上の結果からセルフ・エスティームと学生の就業体験との関連については、高群と低群とでは大きな差は見られなかった。このことは現在の高校生セルフ・エスティームの強弱はアルバイトへの動機付けにはさほど影響しないということなのであろうか。

c. セルフ・エスティームと悩みの有無との関連

悩みの有無	低群 (SE 得点10~19)		高群 (SE 得点28~40)	
	人数	割合	人数	割合
ある	15	31%	1	2%
多少ある	27	56%	26	52%
特にない	6	13%	23	46%
合計	48	100%	50	100%

以上の結果によりセルフ・エスティームの低い学生には悩み深い学生が多いということがみてとれる。セルフ・エスティームが低いがゆえに悩むのか、悩みがあるがゆえにセルフ・エスティームが低くなるのかは定かではないが、いずれにしても今回の調査ではセルフ・エスティームを測定することにより得られたデータは、悩みを抱える学生の数を反映していた。

3. まとめにかえて

Q8において現在の悩みや不安の有無を問うたが、悩みが「特にない」と答えた学生の中には、「ある」と答えるほどのことではないと過小に自己評価している場合も考えられる。そのことはQ12の結果から「こんな悩みで相談していいのかわからない」と答えた学生が、悩みが「ある」と答えた学生の25%存在していたことから言えよう。また、今回セルフ・エスティームについて平均値をもとめた。しかし真の問題は「平均」からは見えてこない部分に存在する。バイステックの7原則を持ち出すまでもなく、学生一人ひとりを「個別化」して対応していくという姿勢は堅持していかなばならないであろう。

今後の対策として考えられることは、①まず学生相談のシステムを活性化させる。②悩みをもつ学生に対して可能な限り個別的な関わりをする。③その学生の潜在的な個性に着目し、それを自己表現できる能力をのぼす教育をする。④社会人学生を積極的に受け入れ、大学を生涯教育的な場にしていく。——等が考えられる。

筆者は社会人学生として大学に入学した。その経験からすれば、確かに社会人学生は大学教育という商品(サービス)に対するコスト意識は高い。しかし、彼らは誠実にコミュ

ニケーションをとっていけばプラスの影響を与えるだけのパワーをもっている。また「話せばわかる」人たちなのである。なお今回の調査では筆者の力量不足もあり、自尊心とその他の相関については大まかな傾向しかつかむことはできなかった。今後は全学年を対象として統計的な分析も含め、継続的かつ本格的な学生実態調査が必要であろう。

最後に、調査にあたって学部生の中平怜奈さん、西本静加さんには大変お世話になった。この場を借りてお礼を申しあげる。

注

- 1) 介護・福祉労働者の男女比は女性8に対して男性2と推定できるとしている。
- 2) 高校2年生5100名を対象にした調査によると「アルバイトを現在している」が18.7%。「アルバイトを現在していないが、したことがある」が33.4%となっており、高校生の約半数は就業経験があるといえる。
- 3) 2007年に調査したある福祉系大学の心理系学科では「死にたいほど深刻である」と答えた学生が4名おり、その学科の約6%を占めていた。

引用・参考文献

- (1) 心理学総合辞典、朝倉書店、2006
- (2) 介護・福祉労働者の労働実態調査（中間

報告）2008／4／14：

<http://www.irouren.or.jp/jp/html/menu16/2008/pdf/>

kaigo-chousa-tyukan-houkoku080414.pdf

2008／09／15取得

- (3) 全国高等学校PTA連合会：高校生アルバイト等に関する調査研究（平成11年）
<http://www.zenkoupren.org/active/report01.pdf>
2008／09／15取得
- (4) 黒木利作：現代の学生相談ニーズ調査報告．第一福祉大学紀要，4，33-43，2007
- (5) 菅 佐和子：SE（Self - Esteem）について．看護研究，17（2），1984
- (6) 学生生活実態調査報告書（2002年度）．三重大学，2002
- (7) 豊田加奈子・松本恒之：大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究．東洋大学人間科学総合研究所紀要，創刊号，2004
- (8) 堀 洋道・山本真理子・松井 豊 編：心理尺度ファイル -人間と社会を測る-．垣内出版，2000
- (9) 山岡俊英：大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究．佛教大学教育学部学会紀要，創刊号』2002
- (10) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 編：セルフ・エスティームの心理学 -自己価値の探求-．ナカニシヤ出版，2004

